

## 卓熙俊先生を偲ぶ

——日韓学術交流への貢献について

戸塚 秀夫

法政大学をベースにして日韓学術交流に多大な貢献をされた卓熙俊先生は、1999年9月5日、逝去されました。享年78歳でした。ご逝去10周年にあたり、韓国のソウル慶熙法科大学に卓先生の蔵書が寄贈され、同時に、同大学図書館長Professor Tim Chong-Wonの編集によって、卓先生の論文集が刊行されることになりました。刊行にあたって、卓先生と親交のあった戸塚秀夫東大名誉教授の次の文章が韓国語に翻訳され、収録されることになる旨の連絡がありましたので、ここに掲載いたします。

『大原社会問題研究所雑誌』編集委員会

Godsendという言葉がある。私が卓先生に、当時勤めていた東京大学社会科学研究所の研究室で初めてお会いしたのは、1982年の初夏の頃ではなかったか、と記憶する。それから15年以上にわたる先生とおつきあいを想いおこすと、その一齣一齣が、まさにGodsendのような宝物として浮かんでくる。

1980年、卓先生は韓国政府の弾圧で成均館大学から「バージ」された。お会いしたのはその直後のことである。当時の日本の大学には、韓国における政治動向、とりわけ1979年の朴大統領射殺事件、全斗煥の「肅軍クーデター」、労働者の工場占拠闘争、学生の街頭デモ、さらには光州蜂起とそれへの大弾圧など、一連の事件を憂慮する多くの人々がいた。金大中死刑判決に抗議する運動がひろがったのは、1980年秋から82年にかけてのことである。東京大学名誉教授隅谷三喜男先生から、「バージ」されて研究の場を奪われた卓先生を東大社研にお招きできないか、というお話があったのは丁度その頃のことである。

韓国での弾圧事件に心を痛めていた私たちは、即座に、よろこんでこれに応じた。正直に告白すれば、それまでに卓先生のお仕事を読んでいたわけではない。だが、韓国における労働問題研究の第一人者であり、リベラルな学風の民主的な学者であり、いま受難の嵐のなかにおられる。それだけで、お招きするに充分な理由がある、と考えた。社会科学研究所教授会は、1982年5月20日、卓先生を外国人研究員として受け入れることを決定している。

韓国問題に関心のある同僚と一緒にお会いした卓先生の第一印象は、何よりも、温厚な篤学の士ということであった。当時の韓国情勢についての断片的な知識をもとに性急に質問しがちな私たちに対して、全般的な動向を落ちついて深く分析する必要がある、という観点でのガイダンスを下された。激しい情熱を内に秘めながらも、慎重に言葉をえらびながら韓国社会の矛盾を鋭く指摘される。それが卓先生の変らぬ態度であった。

卓先生が若い頃、イギリスに留学してラスキン・カレッジ（オクスフォード）に身を寄せておられたということ、そこで国際的な労働基準の重要性について学んだということなど。度々お会いするうちに、卓先生はご自分の学問研究の基礎に、イギリスでの勉強が生きている、とお話になるようになった。当時、私はイギリス労使関係の実態調査に没頭していた。お会いする度に、イギリスについての私の印象を素材にして、日本と韓国のことを話題にしたことを覚えている。

卓先生がもっておられる学識、経験を日本の大学で生かしていただく道はないか。卓先生と接触した私の友人たちのなかからも、そのような強い希望が生まれた。法政大学教授川上忠雄氏その他のご尽力が実を結んで、まず1986年10月から1年間、さらに1988年10月から1年間、卓先生は法政大学経済学部客員教授として来日し、研究指導にあたられた。私自身は、その最初の1年間のセミナーに参加させていただいたが、それは「戦後韓国労働法制プロジェクト」（責任者小林謙一教授）と称するもので、毎回、卓先生は周到に準備された講義案をもとに、韓国の労働法制と労使関係の歴史と現状について熱心な講義をして下さった。卓先生の韓国資本主義分析のなかに、戦前の日本資本主義分析における「講座派」的な枠組が生きている、と感じたのはこの一連のセミナーをとおしてである。このセミナーの記録は、『戦後労働法制プロジェクト研究会における卓熙俊先生の講義および討論』（1988年、比較経済研究所）としてまとめられている。

法政大学比較経済研究所は、その後、1989年度、1990年度にかけて「韓国の経済発展と労働政策研究プロジェクト」を実施したが、このプロジェクトでも、卓先生はさまざまなガイダンスをされた。とりわけ、プロジェクト・メンバーたちの度々の訪韓調査にあたっては、調査の段どりや現地での案内など、支援を惜しまれなかった。このプロジェクトの成果は、小林謙一・川上忠雄編『韓国の経済開発と社会労働政策——計画と政策』（1991年、法政大学出版局）として刊行されている。また、卓先生のご指導のもとに実現した訪韓調査の中間報告は、比較経済研究所の数々のワーキング・ペーパーとしてまとめられている。

以上、私が知る卓先生の日韓学術交流への貢献についてふれてきたが、改めてその偉大さに感動せずにはおれない。実際、卓先生のセミナー参加者たちのなかから、その後、韓国経済、韓国労使関係、韓国労働運動の本格的な研究を志す方々が生まれた。卓先生は、「ページ」されてたどりついた日本の地で、立派に種を蒔かれたのである。

私だけでなく、卓先生とお会いして直接ご教示をいただけたものにとって、卓先生の日本への出現はまさにGodsendであった。如何に理不尽、過酷な弾圧にあおうとも、真理を追求する道を歩みつづける限り、人は必ず真の共鳴者、友人とめぐり会えるのだということを、卓先生は身をもって教えて下さったように思う。その教えを胸に刻んで生きていきたい。卓先生、本当に有難うございました。

（とつか・ひでお 東京大学名誉教授）